

進んで話す・聞く・書く活動を通して外国語に慣れ親しむ子どもの育成

ー 小学6年「アルファベットをさがそう」の実践から ー

1 単元のねらい

活動やゲームの中でアルファベットに触れて、音や文字に関する気付きを得たり、その気付きを実際に試してみたりしながら、アルファベットに慣れ親しむことができる。

2 授業の構想

(1) 子どものとらえについて

去年から外国語活動が始まり、友だちとオリジナルプレゼント交換をしたり、ハッピーレストランを開いたり、英語を使って友だちとコミュニケーションを楽しむ姿が見られる。以下のふりかえりは、レストランのシナリオを使ったゲームをした際のふりかえりである。

- ・よかったことは、楽しくできたことです。楽しくできたので、覚えられました。
- ・私は、ハッピーレストランのシナリオは覚えたかと思ったけど、やってみると分からなくなったりしました。グループでやると、もっとおもしろくて、仲よくできたのでよかったです。
- ・今日の外国語では、長い文の英語を使ってゲームをしました。最初はむずかしくて言えなかったけど、ゲームを楽しみながら覚えられたのでよかったです。

外国語活動では、初めて出会う言葉や表現に不安を感じている子どもは少なくない。だからこそ、楽しみながら言葉や表現に触れていくことが大切である。上記のふりかえりからも、初めて出会う表現や分からない表現でも、ゲームを楽しんだり友だちといっしょに楽しみながら活動したりすることで、少しずつ慣れ親しんでいけることが分かる。そうやって習得したことばや表現などを使って友だちとコミュニケーションがとれたときの喜びは大きい。

本学級の子どもたちは好奇心旺盛で、初めて出会う言語や文化に対しても興味を示す。また、歌を歌ったり発音練習をしたりする場面ではしっかり声が出たり、友だちと関わる場面では男女関係なく様々な友だちとコミュニケーションをとったりと、意欲的に活動に取り組むことができる。ただ、楽しみすぎて本来の活動のねらいからはずれたり、活動内容の意味が分からず何となく活動が終わってしまったりする子どももいる。

以上のような実態から考え、楽しみながらも意味のある活動を展開することで、コミュニケーション活動に積極的に取り組めるよさを生かし、たくさんの友だちと関わりながら外国語に慣れ親しんでいくことが期待できる。そして、言葉や表現への慣れ親しみが強まることで、子どもの話したい・聞きたい・関わりたい思いが高まっていくことが期待できると考えた。

(2) 本単元の内容と各教科で考える思考力・判断力・表現力の育成との関わりについて

中等部では、思考力・判断力・表現力を既習の言語的なルールに則って考え、最も適切な単語や表現を判断し、相手に自分の考えや気持ちを表現する力ととらえている。そこで、本単元では、アルファベットの文字と音のルールに則って考え、判断しながら繰り返し話したり聞いたりする中で、楽しみながら慣れ親しんでいくことをねらいとする。本単元を構成するに当たっては、以下の点に留意した。

- ① アルファベットを声に出したり聞き分けたりする際のポイントを説明することで、目的意識をもって活動に取り組めるようにする。

単元の最初のところで、文字と音のルールに則って、アルファベットを聞き取るポイントを説明する時間を設ける。外国語活動の場合、初めて出会う言葉や表現が多いので、思考したり判断したりするためにはどのようにすればよいのか、いくつかポイントを示すことが大切である。そうすることで、そのポイントを実際に試しながら活動に取り組む姿を期待している。

② 活動やゲームの中で繰り返し考え、判断し、表現することで、新しい気づきを得ながら、アルファベットへの興味・関心を高めて活動に取り組むことができるようにする。

聞こえたアルファベットを選ぶ活動を行う際、「なぜそのアルファベットにしたの？」と毎回聞くようにする。そうすることで、ポイントを意識していなかった子どもも、ポイントを意識し直してアルファベットの音を聞くことができるようになると思う。このように、活動やゲームの中で思考・判断・表現を繰り返すことを通して、難しさや悔しさも感じながら、その気持ちをもっと知りたい・やってみたいという気持ちにつながるはずである。そして、考えながら表現してみたり、試しながら表現してみたりして何度もやってみることで、音や文字に関する気づきが得られたり、表現への慣れ親しみが深まったりすると考える。

(3) 思考力・判断力・表現力の育成に関する学び合う場面の構想について

上記のようなねらいをもち、本単元を4時間で構成する。第1次は、アルファベットに出会う時間である。音が似ている単語を使ってカルタをすることで、子どもたちが「あれ?」「どれだ?」という気持ちをもちながら音に注目して活動に取り組めるようにする。その後、アルファベットのポイントを説明し、再度同じカルタをする。グループで活動することで、友だちとポイントを確かめ合ったり、どうしてすぐを選ぶことができるのか尋ねたりする姿が見られることを期待する。友だちとのやり取りの中で、アルファベットへの疑問や気づきを感じたり興味をもったりすることができるようにするとともに、子どもたちの「わかった」「選べた」という喜びを学級全体で共有できるようにすることを大切にしたい。

第2次は、アルファベットへの慣れ親しみの時間とする。最初は聞く活動を中心に行い、ペアやグループで聞こえたアルファベットのカードを見つけたり、並べたり、アルファベットをつないで言葉を作ったりするなど、短い時間の中で様々な活動に取り組めるようにする。その際、学級全体の場で「どうしてその音を選んだの?」「やって見せて」などと問い返すようにすることで、自分の英語表現について立ち止まって考え直したり、もっと工夫して表現しようとしたりしながら学びを深めることができるようにしたい。そして、アルファベットへの興味関心が徐々に高まり、「書いてみたい」という気持ちが生まれ、もっとアルファベットを知りたい、アルファベットを使って活動したいという思いにつながっていきたい。

3 展開計画

次	主な学習	時	具体的な学習・内容（◇印は、学び合い）
1	アルファベットに出会う。	1	・アルファベットの音に注目してカルタを楽しむ。
2	アルファベットに慣れ親しむ。	2 3 4	・アルファベットを聞く活動を通して、音の違いを感じながらカードを選んだり、並べたりする。 ◇聞こえたアルファベットを選ぶ際、口の動かし方や開き方、音の出方などに注目しながら、なぜその音を選んだのか考える。 ・アルファベットを書く活動を通して、文字の形を生かして絵を描いたり、友だちが描いた絵の中から文字を見付けたりする。

4 授業の実際

(1) アルファベットとの出会い

アルファベットとの出会いの時間は、中学校の英語教師もいっしょに3名体制（中学校英語教師、小学校外国語活動担当教師、学級担任）で授業を行った。その意図は以下の2点である。

- ① 中学校の英語教師が普段中学生に伝えているアルファベットのポイントを、小学校の児童たちにも知ってほしい。
- ② 中学校の英語教師が授業を行うことで、中学校の英語の授業はどんなものなのか体験してほしい。

これらのことから、初めてアルファベットを学習すること、そして、中学校に行っても再度学習することを踏まえて、中学校とのつながりも少し意識しながら活動を行った。

活動内容としては、よく似た音を使って絵カルタを行った。以下は、絵カルタの中で使用した単語である。

bag / bib / bug / big / cap / cat / cab / cut / cop / top / pig / put / pet / peg / pot

わざと似た音の単語を用意することで、子どもたちが「あれ？どれだ？」という気持ちもちながら取り組めるようにするとともに、聞き取る際にただ聞くのではなく、音の違いを意識して聞き取ることができるようなはたらきかけを行った。1回目はどれも同じ音に聞こえてしまい、困っている児童が多かった。そこで、中学校の英語教師がアルファベットのポイント、特に母音のポイントを説明する時間を設けた。

“A”・・・口を「エ」の発音にしてからア
“U”・・・上を向いて「ア！○○だ！」のア
“O”・・・3本指を立てに入れてア（オに近い音が出る）

その後、もう一度カルタを行い、気付いたことや感じたことを学級全体で共有した。このような学び合いを構想することで、2回目はただ聞く、ただ選ぶのではなく、音をよく聞いて音に集中して選ぶとする姿が見られるようになっただけでなく、児童の言葉への気付きを高めることにもつながったと考える。

以下は、授業後のふりかえりの一部である。

- ・ふだん“A”だったら「エー」「E」は「イー」で“U”も「ユー」と言っていたけど、今日発音について知って全部「ア」という発音でむずかしいなと思いました。
- ・聞くのは意外とできて、初めは自信がなかったけど、やっていくうちに自信がもててよかったです。
- ・AとEは発音が似ているので、聞き分けるのが難しかったです。特に得意になったのは“O”で口を大きく開けて発音するのがとっても楽しかったです。
- ・これからもたくさん音を聞きたいと思いました。
- ・日本語にはない発音が出てきて「あ」と「う」の真ん中や、息だけで発音する英語があってむずかしかったです。
- ・アルファベットの音はすごいなと思いました。いろんな音をもっているから、使い分けをするのは大変なのかなと思いました。日本語とはぜんぜんちがうので、覚えたいです。
- ・“CAP”と“CAT”が似ていてカルタがむずかしかったけど、あとで勉強したら似ているようで、ほんとは全くちがっていたのでびっくりしました。

日本語は一つの文字に対して一つの読み方しかないのに対して、英語は複数の音があることに驚きを感じている。おそらく、ローマ字を学習したときに“A”は「あ」と一文字につ

き一音あることを学んだので、英語の場合も同様だと考えたのであろう。ポイントを大切にしながら聞くことで、微妙な音の違いを感じとることができた。また、教師のあとに続けて真似て発音することで、日本語にはない音や息を使って出す音などを感じることもできた。さらに、音に注目するためには耳を使って聞くだけでなく、目を使って見ることも大切であることに気付く児童もいた。以下は、そのことに気付いている児童のふりかえりである。

- AとUとOは音が似ているんだけど、口の形がちがうし、よく聞いたら少しちがっておもしろいなと思いました。
- UとAは両方「ア」と読むけれど、発音の仕方がちがうことが分かりました。これから英語のときは先生の口を見て聞いていこうと思います。
- 英語は見て聞くことが大事なんだなと思いました。

細かい音の違いは、口の開きや動かし方にも関わっていることに気付いている。

アルファベットのポイントを知ってからカルタをし、自分の考えを伝え合う学び合いの中で、楽しい活動の中にも聞くポイントや見るポイントを大切にしながら活動に取り組むことができた。

(2) アルファベットへの慣れ親しみ

① 話す・聞く活動

楽しみながら慣れ親しんでいけるように、初めてアルファベットを学習することを考慮して、単純でなおかつ繰り返し楽しめる活動を中心に行った。以下は、その際取り上げた活動である。

- アルファベットを聞いて、カードを選ぼう
- アルファベットを順番に並べてみよう
- アルファベットを使って、知っている言葉をつくってみよう

これらの活動ではアルファベットについて学んだことをいかして活動に取り組む姿が見られた。また、上で取り上げたふりかえりの一部を紹介することで、苦手意識を感じている児童や勝負にこだわりすぎている児童も、これまでに学習したことを踏まえて取り組むことができた。聞こえたアルファベットのカードを選ぶ活動をした際は、なぜそのアルファベットを選んだのか毎回聞くようにした。以下は、そのときの授業記録の抜粋である。

T : “V”
児童 : ん？ (首をかしげる) Once more once more.
T : “V”
児童A : “B” ?
児童B : “V” ? (ちょうど半々くらいに分かれる)
T : なんでそのアルファベットを選んだか理由が言える人はいる？
児童C : 先生が下くちびるをかんでいたから “V” 。
児童D : “B” は口をとじてからおもいきり出すって言っていたけど、今のはそうじゃなかったから “V” だと思う。
児童 : もう 1 回見たい！
T : OK ! One more chance. “V”
児童 : あっ “V” だ！

口の開きや動かし方などに着目して選ぼうとする姿が見られる。“B” と “V” の音を聞き分けることは決して容易なことではないし、小学校の外国語活動でねらいにすることではないだろう。しかし、何となく選ぶのではなく、根拠をもとに考えたり判断したりすることはほど

数字の1に似ていること，“M”を逆さまにすると“W”に似ていることなど、いろいろな発見があった。外国語を初めて学習する段階であるからこそ、このようなちょっとした気づきをたくさん取り上げながら文字への興味関心を高めることが大切であり、それが文字への親しみにもつながると考える。

5 成果と課題

成果として、カルタやクイズ、伝言ゲームなど楽しみながらアルファベットの学習を展開したことで、ゲームを楽しみながらも、アルファベットのポイントを大切に聞くことができるようになった。また、口の動きを見て音の違いを感じ取ろうとすることができるようになったり、文字に関する気づきを得たりすることができた。これは、アルファベットとの出会いの時間に、アルファベットのポイントを伝えてからリスニングをしたり、音の聞き分けに関する自分の考えを伝え合う学び合いを取り入れたりしたことが関係していると考えられる。ただ漠然と聞くのではなく、集中して細かい音の違いまで聞き取ろうとすることができるようになったり、口の動きを見て音の違いを判断しようとしたりすることができるようになった。このような意識は、アルファベットの学習に限らず、これから外国語を学習していく上で大切にしていきたいことである。また、「なぜその音を選んだの？」と繰り返し問いかけることで、子どもたちは音への意識を高め、音と文字のルールをもとに思考し、判断することができた。それが、しっかり聞こう、しっかり見ようという態度の育成にもつながったと考える。ただ、小学校の場合は音の違いを明確に聞き分けることや、その違いを説明できるようになることがねらいではなく、コミュニケーション能力の素地を養うことが目標である。だからこそ、しっかり話そう、聞こう、関わろうという態度を育成することで、他者とコミュニケーションをとる際にもいかしていけるようにしたい。

また、書く活動を取り入れたことで、文字への気づきが生まれた。自分たちが普段使用している平仮名や片仮名と比べてみたり、逆さまにして見てみたり、文字と文字をつなげてみたり、初めて出会うからこそ様々な姿が見られ、その結果様々な気づきも生まれた。小学校では評価項目の中に、「言語や文化に関する気づき」という項目があるのに対して、中学校では「言語や文化に対する知識理解」となっている。小学校段階で、このような気づきにたくさん触れさせることが、中学校での知識理解に通じると考える。

しかし、今回の実践のように小学校でも中学校でも学習する場合、どこまでを小学校の外国語活動で目指すべきか慎重に考えて授業を展開していく必要があると感じた。絵カルタをした際に、ポイントを何度聞いても、全て同じ音に聞こえてしまう子どもも数名いた。また、リスニングをした際に、微妙な音の違いを最後まで聞き取れなかった子どももいる。そのような子どもが、これからの学習の中で積極的にコミュニケーションをとろうとしなくなったり、中学校で英語を学習することに不安を感じたりしてしまうようでは本末転倒である。そこで、以下の2点を課題として挙げる。

- ①小学校の外国語活動では、単元ごとのねらいやねらいに沿った具体的な学び合いをどのように設定していくか
- ②学習の内容が分からず困っている子どもや活動を楽しめない子どもにどのように支援していくか

この二つの課題についてさらに研究を深め、一人でも多くの子どもたちがコミュニケーションの楽しさを味わうことができるよう、今後も学年や学級の実態に合わせて指導を進めていきたい。
(文責 福島 歩惟・関野 淳也)